

## 美術の窓(157)

## 文華苑の花

大和文華館館長 浅野秀剛

大和文華館は蛙股池のなかに突き出た半島のようなところに建っている。周囲は四季折々の花が咲く庭園で、それを文華苑と名付けている。文華苑の草木の主人は、その大きさと数の多さから松の木とわかっていい。それもアカマツで、昔は結構松茸が取れ、皆で分けたというが、近年は生えなくなっただけだ。

文華苑の四季の花で最も人気が高いのは、三春滝桜である。近年その人気は益々高まり、一昨年は連日千人もの人が押し寄せ、館員一同驚きそして喜んだ。三春滝桜は苑内に10本ほど植えられているが、皆さんの目当ては、館の入口の前に咲く大樹で、支えをせずにこんなに大きくなるのかと感嘆する雄姿を見せてくれる。去年の開花時は、新型コロナウイルス蔓延のため休館したが、問い合わせが多かったので、3月下旬の1週間、広報はせずに文華苑だけ無料開放した。それでもかなりの人が来られ、桜も喜んで見えた。今年は普通に開館したが、新型コロナウイルス騒動が収まっていないのに加えて、開花時期が1週間以上早まったことと、昨年の休館が響き、一昨年の賑わいには及ばなかった。

苑内の三春滝桜は、福島県三春町の国の天然記念物になっている三春滝桜の種子から育てられた苗木をいただき、植えたものである。1982年に7本、翌年に10本いただいたが、現在は10本ほどに減ってしまった。三春町に、16世紀の画僧、雪村の終焉の地といわれる雪村庵がある関係で、三春町歴史民俗資料館の開館に合わせて「雪村—三春への道」展が開催された。1983年4月のことである。その展示会の実現に、大和文華館、および当時の大和文華館芸芸部の林進氏が協

力したことへの返礼である。この春には、三春町で、日本アート評価保存協会主催、三春町教育委員会共催による「雪村シンポジウム2021」が開催され、私も参加した。残念ながら、三春滝桜の見ごろは過ぎていたが、盛会であった。

三春滝桜が散ると、山桜の季節となる。苑内にも数本の山桜があるが、私が一押しなのは展示室の奥、バルコニーに向かって枝を伸ばす1本である。私が大和文華館に勤め始めた2008年当時より格段に大きくなった。山桜が終わると八重桜となる。八重桜では、内門脇の八重桜が形よく綺麗であったが、数年前の台風で枝が折れ、まだまだ癒しの年月が必要のようだ。早く以前の姿に戻ってくれるよう祈っている。

桜に次いで人気なのは、笹百合である。5月下旬から6月上旬が開花期であるが、今年は他の花同様早くに開花し、ピークは5月末であった。私の認識では、10年くらい前までは、三春滝桜より笹百合の方の人气が高かったように思う。笹百合は数ある百合のなかで最も清楚である。文華苑の笹百合は天然のもので、笹の群れの中で首をもたげ、花を咲かせる。群生ではなく、笹の緑の波の中に白い花が顔を出すのである。それがとても良い。花の命が短いのも桜に似ている。

数年前は、夏の終わりから秋にかけて、苑内や近所のあちらこちらに高砂百合が生えていた。私に来た頃はほとんどなかったように思うので、急激に広がったのだと思う。高砂百合の寿命も短く、1週間と持たないもの、一つ散れば別の花が咲き、秋中楽しめたのであるが、その後、次第に姿を消し、近年は、2、3輪しか見つけることができない。

しかも弱々しい。花の群れにも花1輪1輪にも個性があり、その在り様も毎年異なる。人間と変わらないな、と思ってしまう。

私は、苑の一隅に住んでいるが、その宿舎の周りにも四季折々の花が咲く。春は梅に始まり、三春滝桜も山桜もある。水仙も少しだけあるが、今年は非常に遅く、3月になってから咲いた。おかげで4月にも水仙が楽しめたのであるが、どうして遅いのかよく分からない。日当たりの悪さのせいであろうか。

5月には少しであるが白い鉄線が咲く。鉄線で思い出すのは、京都の妙心寺天球院方丈障壁画の「籬に草花図」である。郷里の秋田県能代にいた頃は、およそ花というものに全く興味がなかった。京都で暮らすようになり、社寺を日常的に巡るようになって、はっきり記憶に残っているのが「籬に草花図」である。籬に絡まる姿が何とも品がある。それでいて力強い。鉄線という名なのか、何かしっくりこないイメージだな、というようなことを思った記憶がある。山楽と山雪の作というが、絶対山雪だろうと根拠もなく断定したこともよみがえる。私と花のつきあいは絵から始まったことは確かである。

鉄線が散り、6月になると、その隣にくちなしの花が咲く。私がくちなしを知ったのは、渡哲也の歌からで20代の時であるが、くちなしの縁は大和文華館に来てからの、ここ10年余りのこととなる。浮世絵師、歌川広重のスケッチ貼4冊が大英博物館に所蔵されているが、そのうちの2冊は、天保8年(1837)春から夏にかけての大旅行のスケッチである。私は、それを「木曾路写生貼」と名付けて論文なども書き、今でも折々講演にも使う。その写生貼に、くちなしが出てくるのである。「木曾路写生貼」には、明治期に改装されたときの著しい乱丁がある。それを復元を試み、不完全ながら何とか原形に近い形を提示したのであるが、その過程で、「口なし」と記されたス

ケッチを見出した。その時は嬉しかった。同じ丁に、矢矧川と秋葉神社が描かれていたので、東海道を通っての帰路の途中で描かれたものと分かり、江戸には、くちなしの開花後に帰り着いたと結論づけることができたからである。広重は千に近い花鳥版画を描いているが、植物学者によると、その多くは正確さに欠けるという。しかし、少なくとも写生貼の「口なし」は正確であると信じている。

6月から7月はあじさいの季節であり、文華苑にも「あじさいの小径」があるが、今年はどうな花を咲かせてくれるだろうか。



大英博物館蔵「スケッチ貼」より  
「矢矧 口なし」の半丁



今年の大和文華館入口前の三春滝桜

季刊 美のたより No.215

令和3年7月3日

発行 大和文華館